

相馬廣明名誉教授が獨協医科大学で講演

胎盤とウイルス感染などをテーマに

東京医科大学名誉教授（産科婦人科学）で城西病院名誉院長、茨城国際親善厚生財団（IIFP）理事の相馬廣明名誉教授が6月1日、栃木県下都賀郡壬生町の獨協医科大学で、教育支援センター・国際協力支援センター講演会として、「子宮内感染についての日本住血吸虫症やジカウイルス感染などをめぐる話題」について講演しました。講演会は、同大学の教育支援センター・国際協力支援センターが主催、獨協医学会共催。

相馬名誉教授は、戦争中に京城帝大医学部で学び、終戦後は九州大学医学部に転学、広島県福山国立病院で医療に従事。この地で、肺結核を疑われ人工早産を勧められた妊婦を治療し、日本住血吸虫症感染と判断し治療した。そして妊婦は、高熱が続き貧血があったが、無事に子供を出産。母体も治療のかいあって、回復していったという。相馬名誉教授は、「日本住血吸虫症と診断、治療した症例だったが、綿密な検査を行わなかった」と語った。「胎盤の中に卵や成虫を見つけないと、長い間研究を続けてきた」と語る相馬名誉教授は、その研究成果である胎盤内の成虫や卵が移った写真をスライドで披露しました。

引き続きジカウイルスの話題に移り、「リオ五輪で話題となったジカウイルスは、アフリカのウガンダからブラジルに渡ったが、アフリカからブラジルへの感染では小頭症の新生児が多く発生している」と語り、小頭症の子供たちが多く生まれる要因として広島での原爆症などの症例を挙げました。

またジカウイルスの妊婦から双子で生まれた一人には障害が現れ、もう一人の子供には全く障害が現れなかった事例を挙げ、胎盤の不思議なメカニズムについても分かりやすく解説しました。

会場からは「なぜ一人だけに障害が現れたのか。胎盤の生成過程に鍵があるのでしょうか」など相次いで熱心な質問が会場から寄せられました。

平成 29 年 6 月 3 日



相馬廣明名誉教授

胎盤研究の第一人者。1960年からアメリカで胎盤の研究に従事。その後、ネパール・ヒマラヤでも胎盤研究を続け、現地での診療や産婦人科医の育成に尽力。ネパール国王から勲章を授与され、「ネパールの産婦人科の父」と称されています。

